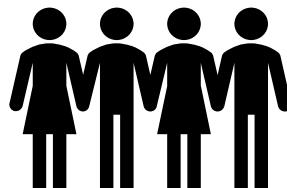


「ともに歩むあたたかさのある教会」をめざそう

教皇フランシスコ 世界代表司教会議 第16回通常総会

「シノドス流の教会（交わり、参加、宣教）」（シノドス最終文書）の抜粋（第一部～第二部）

基礎編：「シノドス流」とは何か



- ①神の民への意見聴取と聞き取りのステージ（2021年～2023年の間に実施）
 - ②「世界代表司教会議」（世界シノドス）1会期（2023年10月）と2会期（2024年10月）→『シノドス最終文書』
 - ③シノドスの旅の実践段階：「実施ステージ」（2025年6月～2028年10月『教会総会』）→ 2025年～2028年
- ※ 世界シノドスは、実施ステージの歩みを含むもの。

（『シノドス最終文書』の理解のために重要な部分や教区、地区、小教区等に関連するテキストの抜粋）

広島教区用

教皇フランシスコによる付記（2024年11月24日）

項目 ページ

「わたしはこれまで歩んできたシノドスの旅を価値を認め、本『最終文書』に示されている指示のすべてを、今、
教会に委ねます。この文書は、聞き取りと識別によって、数年かけて熟したもののが報告であり、教会の生活と
使命のための権威ある方向づけとなるものです。」

p. 13

「『最終文書』はペトロの後継者の通常の教導権に数えられるものであり、しかるべき受け取られるよう求めま
す。」

p.13

「地方教会とその連合体は、種々の法や本文書自体が定める識別と意思決定プロセスを通して、文書に示されて
いる権威ある指示をおのの文脈に応じて実現していくよう、今すでに求められています。」

p.13-14

「『最終文書』には、その基本的な方向性に照らせば、地方教会とその連合体において、今から実施可能な内容
が含まれています。その内容は、さまざまな文脈を踏まえており、宣教するシノドス流の教会に固有のスタイル
を習熟させ磨きをかけるためのこれまでの実践と今後の課題を考慮したものです。」

p.15

はじめに

ヨハネ20・19-20

「教会の生活における新たな歩みは、どれもが源泉への立ち帰りです。復活日の夕刻に、二階の広間で弟子
たちが体験した復活した主との出会いを、今一度味わうのです。」

1 p.17

「『2021-2024年シノドスともに歩む教会のため一交わり、参加、そして宣教』の中心には、主に従いつつ、
その使命に忠実な者となるあり方を探るよう、教会を喜びと刷新に招く呼びかけがある」

3 p.20

「この呼びかけは、……例外なく、洗礼を受けたすべての人への呼びかけです。『神の民全員が福音宣教の主体
です。その中にあって、洗礼を受けた一人ひとりが、宣教のメインキャストとなるよう呼ばれています。
わたしたち全員が宣教する弟子だからです。』」

4 p.20

「シノドスの全行程は、教会の聖伝に根ざしていて（第二バチカン）公会議の教導職に照らして実施されました。…公会議が、福音に聞くことから生まれる回心の連續によって聖性へと招かれている、神秘体であり神の民である教会の姿について教えたことを、シノドスの旅は確かに体現しています。その意味でこの旅は、公会議のさらなる受容の行為となるものであり、**公会議のインスピレーションを継続させ、現代社会のためにその預言的な力を再び發揮させるもの**なのです。」

5 p.21

「2021年に始まったシノドスの歩みの最初の実りは、すでに目に見えるものとなりました。…**靈における会話、共同識別、召命のたまものの共有、宣教における共同責任といった実践**が広がっています。」

7 p.20-21

「教会生活にとてきわめて重要ないつつかのテーマについては、国際的な協議の結果、各大陸の司教と専門家で構成される**研究部会に委ね、その作業はシノドス流の方法で行う**よう教皇が求めています。部会がすでに研究を開始した、教会生活と宣教の領域は以下のとおりです。

8 p.23

- 一 東方諸教会とラテン教会との関係のいくつかの側面。
- 二 貧しい人の叫びと地球の叫びに耳を傾けること。
- 三 デジタル環境での宣教。
- 四 『司祭養成基本綱要』の、シノドス的で宣教的な観点からの改訂。
- 五 特定の奉仕職の形態に関する神学的・教会法的ないいくつかの懸案事項。
- 六 司教・修道者・教会の諸団体の間の関係を規定する文書のシノドス的で宣教的な観点からの見直し。
- 七 司教のあるべき姿と奉仕職のいくつかの側面（とくに、司教候補者の選定基準、司教の法的権能、使徒座定期公式訪問の性質や実施）をシノドス的で宣教的な観点に照らすこと。
- 八 教皇代理の役割を、シノドス的で宣教的な観点に照らすこと。
- 九 論争を巻き起こしている教義的、司牧的、倫理的課題の共同識別のための、神学的基準とシノドス流の方法論。
- 十 神の民の間にある、エキュメニカルな歩みの実りを受け取ること。

8 p.23-24

「シノドス流の歩みは、本世界代表司教会議総会の閉会をもって終了とはなりません。実践段階もその一部です。

……すべての地方教会に対し、それぞれの日々の旅を、意見聴取と識別というシノドス流の方法で続けるよう求めます。そして、さまざまな教会の現場において、シノドス流の確かな回心を実現するための具体的道筋と養成方法を見極めるよう望みます。さらにシノダリティの実現の度合と洗礼を受けた人全員の教会生活への参加達成度合いの評価についても考えておくべきです。」

9 p.25

「この『最終文書』は、宣教への召命は同時に、各地方教会での回心と全教会での回心への召命でもあるという、使徒的勧告『福音の喜び』に示された視点を踏まえた自覚の表明です。」

11 p.26

「『最終文書』は、復活に関する福音書の記述に導かれて展開しています。復活の日の早朝に墓へ駆けつけたこと、復活したかたの二階の広間での出現、そして湖畔での出現が、わたしたちの識別のインスピレーションであり、よう、対話の糧でした。わたしたちは、聖靈になすべきことをおしえていただき、ともに進むべき道を示してもらえる復活のたまものである聖靈を願い求めました。」

12 p.27

第一部

シノダリティの神髄

ヨハネ20・1-2

聖靈によって回心に呼ばれた者たち

(シノダリティに関する共通理解が示され、第二バチカン公会議に根ざしたその神学的理解、靈的基盤が概説されている)

「復活の朝、わたしたちは三人の弟子を見ます。マグダラのマリア、シモン・ペトロ、そしてイエスが愛しておられた弟子のことです。彼らは、それぞれ固有役割を担っています。…この三者の互いに影響し合う関係は、シノダリティの核心を体現しています。」

13 p.29-30

神の民である教会、一致の秘跡

「神の民であるというアイデンティティは、父と子と聖靈の名による洗礼から生まれます。このアイデンティティは、聖性への招きとして、救いのたまものを受けようすべての民を招く宣教への派遣として具現化されます（マタイ28・18-19）。ですから洗礼から、宣教するシノドス流の教会が生まれるのであります。」

15 p.31

「み国を目指して旅する神の民は、交わりと一致の源である エウカリスチアによってたえず養われています。」

16 p.31

「神の民は、洗礼を受けた者たちの単純な総和ではなく、シノダリティと宣教の共同体的・歴史的な主体であり、今はまだ時の中を旅していくながらも、すでに**天上の教会との交わり**のうちにあります。…信仰と洗礼によって、この民に組み入れられたわたしたちを支え、寄り添って歩んでくださるのは、…おとめマリアいのちを差し出すまでに信仰をあかしした使徒たち、あらゆる時代と場所の聖人たちです。」

17 p.31-32

「世にあって、世のために生きることで、**神の民は地上のすべての民とともに歩み、彼らの宗教や文化と対話し、そこにあるみことばの種を認め、神の国に向けて前進する**のです。」

17 p.32

「神の聖なる民すなわち教会において、信者の交わりは、同時に教会の交わりであり、司教の交わりに現れます。…この**多面的な交わりの奉仕職に主が据えられたのが、使徒ペトロとその後継者**です。」

18 p.33

「神のみ心には貧しい人々のため、そして疎外された人々、排除された人々のための優先席があります。ですから、彼らの優先席は教会の中にもあります。…**貧しい人を優先するのは、キリスト教の信仰に内在すること**です。…教会は、信者の大半を占めている貧しい人とともに貧しくなり、彼らに耳を傾け、彼らを福音宣教の主体として大切にし、彼らが聖霊から受けているカリスマをともに認識するすべを学ぶよう求められています。」

19 p.34

「『諸国民の光はキリスト』です。この光は、人間の弱さが刻まれ、罪で曇ってはいるものの、教会の面に輝いています。教会は、人類家族のきずな、かかわり、兄弟愛、これらを広げるための生きたパン種となる、恵みと責任をキリストから授かっており、その歩みの意義と目的を世にあかししています。」

20 p.34-35

神の民の秘跡的ツール

「教会がたどったシノドスの旅で気づかされたのは、**多様な召命、カリスマ、奉仕職には一つのルーツがあること**です。それは、「皆一つのからだとなるために洗礼を受け、皆一つの靈をのませてもらった」（一コリント12・13）ということです。**洗礼はキリスト者として生きるうえでの基盤**です。」

21 p.35

「洗礼において授かった聖靈の塗油のおかげで、**全信者が信仰の感覚（センスス・フィディ）と呼ばれる福音の真理に対する直感力を保有しています**。…そのため教会は、洗礼を受けた人の総体が信仰と道徳のことがらについて全面的に賛同するとき、神の聖なる民はその信仰において誤るはずがないと確信しています。…**信仰の感覚が目指すのは、信者たちの総意（コンセンサス・フィデリウム）に至ること**です。」

22 p.35-36

「洗礼によって、すべてのキリスト者は**信仰の感覚**を共有しています。ですからこれは、**シノダリティの原理**であるだけではなく、**エキュメニズムの基盤**をなすものでもあります。」

23

「洗礼は、一連のキリスト教入信の流れの中で捉えなければ、十全に理解することはできません。…キリスト教入信の過程にある**堅信の秘跡**は……洗礼を受けた人と共同体の生活の中で、**聖靈降臨の恵みを現実にするもの**であり、宣教の炎にかき立てられる教会のおどろくべき働きを新たにする、大きな価値を持つたものです。」

「すべての信者は……**聖靈が各自に豊かに分け与えるカリスマ**を受け入れ、それらを神の国ために謙虚に創意をもって積極的に役立て、尽くすように求められているのです。」

24-25 p.39

「感謝の祭儀、とりわけ**主日の祭儀は、聖なる神の民が集いまみえる、第一の基本のかたち**です。すべての信者の『十全に、意識的かつ行動的…参加』をもって、さまざまな奉仕と司教や司祭の司式をもって、キリスト教共同体は目に見えるものとなり、その共同体の中で、すべての人がそれぞれ分担する、**宣教に対する共同責任が果たされる**のです。ですから、キリストのからだである教会は、感謝の祭儀を通して、一致と多様性との調和的な連結を学ぶのです。……聖靈の生み出す調和は一様ではないことを、教会のたまものはどれも共同体の構築に仕向けられていることを、感謝の祭儀ほど雄弁に語るものはありません。」

26 p.40

「感謝の祭儀の集会とシノドス会議には密接な結びつきがあります。形態は異なるものの、どちらにおいても、**二人または三人がその名によって集まるところにはご自分もその中にいるというイエスの約束が実現**されています。シノドス会議は、キリストとその教会との、聖靈の働きによって強められる一致を祝う行事です。」

27 p.40

シノダリティの意味と特徴

「『シノダリティ』や『シノドス的／シノドス流』という用語は、シノド（ス）（＝教会会議）に集まるという教会の古くから続く習慣より派生したものです。……そのすべての形態に共通しているのは、対話し、識別し、決定するために集まることです。」

28 p.42

「シノダリティとは、キリストとともに、また全人類に結ばれて、神の国へ向けて、キリスト者がともに歩む旅だということ。また、宣教を志向したもので、教会生活のさまざまなレベルで集会をもつこと、互いに耳を傾けること、対話、共同識別、キリストが聖靈のうちに生きておられることの表れである合意形成、分担された共同責任のもとでの意思決定で成るものです。……簡単にまとめると、シノダリティとは、教会をより参加型で宣教的にするために、靈的刷新と構造改革の道だと言えます。」

28 p.42-43

「キリストの母、教会の母、人類の母であるおとめマリアは……まさに、耳を傾け、祈り、熟慮し、対話し、寄り添い、識別し、決断し、行動する教会の姿そのものです。耳を傾けるすべ、神のみ心への注意深さ、みことばにに対する従順、貧しい人への困窮をくみ取る感受性、歩み出す勇気、助ける愛、賛美の歌、聖靈に包まれての喜びを、マリアから学ばなければなりません。」

29 p.43

「シノダリティは教会生活の三つの明確な特徴を表しています。

a) 第一に、シノダリティが示すのは「教会の生活と宣教を形容する固有の『様式』（modusのことです。）
主イエスに呼び集められた神の民がともに歩むという本質、そして（聖靈の力によって福音をのべ伝えるようになるため）集会を開き参集する本質を表しています。これは、教会の生活と運営の、通常のスタイルに現れているはずです。（シノダリティとは）こうした『生活様式と運営スタイル』（modus vivendi et operandi）」

30 p.43-44

b) 第二に、シノダリティは……地方、地区、全世界などの実現のレベルはさまざまに、制度において類似的にシノドス的本性が現れる教会の機構やプロセスを指します。こうした機構やプロセスは、聖靈に耳を傾けることで進む方向を見極めるよう求められている、教会の真正な識別に寄与するものです。」

30 p.44

c) 第三に、シノダリティは……地方、地区、世界規模で、さまざまなかたちで神の民すべてを巻き込み、ローマ司教との団体的・位階的交わりをもった司教たちの主宰で行われ、教会の取るべき道や、特定の問題の識別のため、また福音化するという教会の使命を果たすうえでの決定や方針を採択するためのものとなっている状態です。」

30 p.44-45

「シノダリティは、神の民である教会の、固有の生活様式と運営スタイルを示しています。その交わりは、ともに歩むこと、集会を開き参集すること、福音化という自らの使命に全成員が参加することをもって、具体的に明示されます。」

31 p.45

「すべてのカリスマと奉仕職を活かすことによってシノダリティは、神の民が、あらゆる場所、あらゆる時代の人々に福音の告知とあかしをもたらし、神の望まれるキリストにおける兄弟愛と一致の『目に見える秘跡』になれるようにします。シノダリティと宣教は緊密に結びついています。」

32 p.46

「シノダリティは、位階的奉仕職そのものを理解する、もっとも適切な解釈の枠組みを提供し、聖靈においてキリストが司教たちに託した使命をしかるべき視点で位置づけます。それゆえシノダリティは、権能行使する者を含め、教会全体を回心と改革に招いているのです。」

33 p.46-47

調和としての一致

「シノドス流の教会は、イエスが弟子たち与えた新しいおきて「互いに愛し合いなさい」によって、かかわりの開花する場という特徴をもちます。……教会は、三位一体の神に基づきつけられた人間関係の強さをあかしすることができます。召命、年齢、性別、職業、境遇、社会的帰属の違いはどのキリスト教共同体にも存在していますが、その違いが一人ひとりに対し、他なるものとの出会いという個人の成熟に不可欠なものを提供していきます。」

34 p.47

「性格も性別も年齢も役割も異なる中で結ばれる人々のかかわりの豊かさが体験されるのは、第一に家庭においてです。…ですから家庭はシノドス流の教会の欠かせない実践を学び経験するのに特権的な場です。」

35 p.48

「シノドスの歩みで明らかになったのは、**聖靈が神の民において、多種多様なカリスマと奉仕職が奮起するよう終始励ましておられる**ということです。……そしてまた、男女を問わず洗礼を受けたすべての人の参画と共同責任の分担行使の、可能性を広げたいという願望も目立っていました。」

36 p.49

「シノドスの歩みはさらに、**諸地方教会の靈的遺産**も明らかにしました。………ペトロの後継者の役務は、合法的な多様性を保護し、また部分的なものの統一を傷つけることなく、それに役立つよう配慮すること。」

37 p.49-50

「教会全体はつねに、多様な民族と言語から、また独自の典礼、規律、神学的・靈的遺産をもった諸教会から、そして共通善に奉仕する多様な召命、カリスマ、奉仕職から成ってきました。この**多様性の一致は、隅の親石であるキリストと、調和の匠である聖靈によって実現されています。**多様性の中でのこの一致は、まさに教会の普遍性によってあらわされるものです。……本総会が求めるのは、出会いの道、相互理解の道、たまもののかかわりの道を歩み続けることです。」

38 p.49

「わたしたちは、**他のキリスト者たちとのエキュメニズムの旅**……を続け、それを充実させるというカトリック教会の責務を再確認します。……わたしたちは、エキュメニズムの旅の成果を教会の実践に取り入れることが、完全な交わりを目指す道の次なる一步となることに、希望をもって注目したいと思います。」

40 p.51-52

「**シノドス流の教会**に典型的な、対話、出会い、たまものの交換は、**他の宗教の伝統との関係に開かれる**よう求められています。その目的は、真摯な愛の心で、友愛、平和、和合を築き、倫理的、靈的な価値観や経験を分かち合うことなのです。」

41 p.52

「**シノドス流の教会**は、**オーケストラのイメージ**で表現できます。音楽の美しさとハーモニーを生み出すには多様な楽器が必要で、その調べの中で、それぞれの音色は独自の特徴をもったまま、共通の使命に奉仕しています。**聖靈の教会での働きによる調和**は、このようにして現れ出ます。」

42 p.53

シノドス的靈性

「シノドスの靈性というものは聖靈の働きから生まれ、神のことばに耳を傾けること、観想、沈黙、心の回心を求めます。……聖靈は確かな導き手であり、**わたしたちの第一の務めは、その聖靈の声を聞き取れるようになること**だということです。聖靈はあらゆる人を通して、あらゆる事象を通して語っておられるのです。」

43 p.53-54

「さらにシノドスの靈性は、**禁欲、謙遜、忍耐、ゆるす意欲、ゆるされようとする心**も求めています。」

43 p.54

「キリスト教共同体の刷新は、恵みが先立つことを認識して初めてかなうものです。個人も共同体も靈性に深さを欠いていれば、シノダリティは組織にとっての方便に矮小化（わいしょうか）されてしまいます。わたしたちに求められていることは、共同体のプロセスに個人の靈的経験の実りを反映させるだけではありません。**互いに愛し合いなさい**という新しいおきての実践が、いかに神との出会いの場であり形態であるのかを経験することも求められています。この意味でシノドス流の教会の視点は、……その形式の刷新にも寄与するのです。すなわち、**参加に開かれた祈り、一緒に行う識別、分かち合いから生まれる奉仕となつて放たれる宣教の力**、といった形式です。」

44 p.54-55

「**靈における会話は一つの手段**であり、限界はあるにせよ、『靈が諸教会に告げること』の聞き取りと識別をかなえ、多くの実りをもたらします。この実践は喜び、驚き、感謝を生み出し、個人、グループ、そして**教会を変容させる刷新の歩み**として経験されました。」

45 p.55

「『会話』という語は単なる対話以上のこと表現しています。……『靈において』会話するということは信仰の光に照らされ、神のみ旨を探し求めながら、聖靈がまぎれもないご自身の声を聞かせてくださる福音的な雰囲気の中で、分かち合う体験に身を浸すことを意味します。」

45 p.55-56

「シノドスの歩みの各段階で、**教会内において、いやし、和解、信頼回復の必要性を訴える声**がなり響いていました。とりわけ、あまりに多くの、さまざまなたぐいの虐待に関連する、社会的スキャンダルについてです。……この道を歩み続けたいという願いは、シノドス的刷新の成果なのです。」

46 p.56

社会への預言となるシノダリティ

「シノダリティの真の実践によって、キリスト者は、支配的な考えへの批判的預言となりうる文化をはぐくみ、そして、現代社会が直面する多くの課題の解決の追求と、共通善の構築のために、キリスト者ならではの貢献をかなえるのです。」

47

p.57

第二部

舟で一緒に かかわりの回心

ヨハネ20・2-3

(かかわりが、キリスト教共同体を築き、召命、カリスマ、奉仕職で織り合わされて行くことを概説)

「『わたしは漁に行く』『わたしたちも一緒に行こう』シノドスの歩みも、こうして始まりました。つまり、ペトロの後継者の招きを聞いて、それにこたえました。……わたしたちは一緒に祈り、振り返り、苦労し、対話を重ねました。ですが、何にも増してわたしたちが経験したのは、教会に活力を注ぎ、その構造を生き生きとさせるのは、かかわりなのだということです。

p.59-60

新たな関係性

「このシノドスの全行程を通じて、また世界のあらゆる地域で、**かかわりをはぐくむことのできる教会**を求める声が上がりました。かかわりとは、主との関係、人との関係、家庭での関係、すべてのキリスト者どうしの関係、社会集団間の関係、諸宗教間の関係、被造物との関係です。……ですから、**シノドス流の教会であるためには真の意味でのかかわりの回心が必要なのです。**」

50 p.60-61

「わたしたちに求められている回心の見取り図を考え、イエスの姿勢を体得するには、福音書に目を向けなければなりません。福音書は**イエスの、『聖地の道々で出会う人々に、耳を傾け続ける姿**を示します。』……………出会った相手の必要と信仰に耳を傾けると、イエスからことばとわざがあふれ出て、彼らの人生は新たにされ、**関係性を修復する道**が開かれるのです。」

51 p.62

「かかわりにおける回心の必要性は、間違いなく男女間の関係にも及んでいます。……**男女の等しい尊厳と補完性を尊重した関係を生きようとするなら、わたしたちは福音をあかししている**のです。シノドスの歩みの間、信徒も奉獻生活者も含め、全地域、全大陸から女性たちが繰り返し表明した痛みと苦しみの訴えは、わたしたちがそれをどれほどなしえていなかったかを明らかにしています。」

52 p.63

さまざまな文脈の中で

「主イエスにおいて関係性を刷新するようにという呼びかけは、その弟子たちが生き、教会の使命を果たしているさまざまな文脈の中に響いています。………そうした文脈はどれもが、様相はさまざまであるものの、**ゆがんだ関係性の痕跡**を残していたり、**時には福音と相反するもの**であったりします。………わたしたちはかかわりの回心の道を歩む出すために、それらと向き合い、克服しなければなりません。」

53 p.64

「男女間の不平等、人種差別、階級化、障害者差別、ありとあらゆるマリノリティに対する権利侵害、移民を歓迎しうとしない姿勢などです。わたしたちの姉妹である母なる**地球との関係にさえも亀裂の形跡**がある。」

54 p.65

「この世界を苦しめている多くの悪は、教会にも現れています。……教会は、聖職者や教会の委嘱を受けた者による性的虐待、精神的虐待、経済的虐待、構造的虐待、パワハラ、モラハラの被害者やサバイバーの声に、心を碎いて耳を傾けなければなりません。耳を傾けることは、いやし、悔い改め、正義、和解へと向かう旅の**基本要素**です。」

55 p.65

「**排除と疎外に苦しむ人の声に耳を傾ける**ことで、自覚が強まります。生けるかた、主が傷を負ったかかわりをいやすことができるよう、その**重荷を引き受けることは教会の使命**の一部なのだと。それによってのみ、教会は『いわば秘跡、すなわち神との親密な交わりと全人類の一致のしるし、道具』になることができるのです。」

56 p.66

「さらに、世界に開かれた姿勢であれば、**地球の隅々に、どの文化にも、どの人間集団にも、聖靈は福音の種を蒔いておられる**のにおられることに気づきます。」

56 p.66

宣教のためのカリスマ、召命、奉仕職

(洗礼を受けたすべての人)

「キリスト者は、個人で、また仲間で、福音のあかしと告知のために、聖靈が与えるたまものを用いて実りを結ぶよう、呼ばれています。………キリスト教共同体では、洗礼を受けたすべての人は、おのれに固有の召命と置かれている生活状況に応じて、分かち合うべきたまものによって豊かにされています。」

57 p.67

「洗礼によって、男も女も、神の民において等しい尊厳を受けています。しかしながら、女性たちは依然として、そのカリスマ、召命、教会生活のさまざまな分野における自分たちの地位が、十分認められるところから疎外されており、共通の使命への奉仕にとって不利益となっています。……本総会が求めるには、女性の役割に関する、すでに現行法に規定のあるすべての機会を、とくにいまだ果たされていない場において完全に実現させることです。」

60 p.70

(子どもたち)

「教会は、子どもたちの貢献なしにはシノドス流を貫けません。子どもは、存分に力を発揮できるはずの、宣教の担い手です。子どもたちの声は共同体にとって欠かせないものであり、わたしたちはその声に耳を傾けなければなりません。………子どもたちを受け入れることのできない社会は、病んだ社会です。戦争、貧困、育児放棄、虐待、人身取引などで多くの子どもが味わっている苦しみは、………恥すべきことです。」

61 p.71

(若者たち)

「若者もまた、教会のシノドス流の刷新に貢献できる存在です。………そのために、若者には、思いやりのある粘り強い寄り添いが約束されていることが必要です。具体的には、彼らの貢献から生まれた提案、『識別ための同伴の体験』は、再度取り上げるに値します。」

62 p.72

(障害者たち)

「福音宣教の精力的な主体として呼ばれ派遣されると自覚する障害者の使徒的能力を、わたしたちは認識しています。彼らのとても豊かな人間性からの貢献を生かしたいと思います。」

63 p.72

(夫婦と独身を選んだ人)

「**教会を豊かにする召命の中で、夫婦の召命は際立っています。**……結婚の秘跡は、家庭生活、教会構築、社会参画に同時に携わる、特別な使命を与えます。……本総会は、結婚や性倫理についての聖伝と教会の教えに対する忠実さとして**独身を選んだ人に、寄り添いと支援をあらためて表明します。**」

64 p.73

(さまざまな形態の奉獻生活者たち)

「奉獻生活には、その預言的な声をもって、教会と社会に問いかける使命があります。何世紀にもわたる経験の中で、修道家族は、シノドス流の生き方と共同識別の実践経験を重ねて、個々のたまものと共同体の使命を調和させることを学んできました。修道会、使徒的生活の会、在俗会、さらに諸会、運動体、新しく創立された共同体は、**教会におけるシノダリティの成長に特別な貢献**をなしています。」

65 p.74

「さらに**シノダリティは、地方教会の司教、奉獻生活の会や教会関連団体の責任者**に対し、共通の使命のためのたまものの交換を盛り立てるべく**関係を強化する**ように促し、場合によってはそれを強く求めています。」

65 p.74

(信徒たち)

「**信徒の第一の任務は、福音の精神を世俗の現実に浸透させ、それを変革させること**です。……数あるカリスマの中から職務として奉仕職に立てるのに適したものを識別することが必要であり、そのための適切な基準、手段、手続きの整備が求められています。……**宣教するシノドス流の教会では、信徒の奉仕職の形態のさらなる増設を推進するよう望まれています。**すなわち、典礼の領域以外に、叙階の秘跡を必要としない奉仕職を設けることです。」

66 p.75

(神学者)

「神学者は、啓示によって照らされた現実の理解を神の民が深めるのを支え、宣教に適した返答やふさわしい表現を練り上げることを助けます。……『神学のカリスマには、特別な奉仕を果たすことが求められています。……したがって**教会のシノダリティは、神学者に対し、シノドス流の方法で神学を行い、神学者同どうし互いに聞く力、対話する力、多種多様な要求や貢献を統合する力を高める義務を課しています。』』」**

67 p.76

「これに鑑み、適切な制度を設け、司教たちと神学研究従事者との対話を促進することが急務です。本総会は、神学機関に対し、シノダリティの意味の解明と考究の作業を継続し、それによって地方教会における養成に同伴するように要請します。」

67 p.76

調和の奉仕する叙階された奉仕職

「教会のすべての奉仕職と同様に、司教職、司祭職、助祭職は、福音をのべ伝え、教会共同体を築く奉仕に従事しています。」

68 p.77

(司教)

司教の役務—靈のたまものを一致のうちにまとめ上げること

「司教の役割は、地方教会をつかさどることです。司教は、地方教会の内側にある一致の目に見える原理であり、またすべての教会との交わりのきずなであります。……司教に叙階される人は、特権や、自分一人で果たすべき任務を背負わされるのではありません。むしろ司教は、聖靈が個々人や共同体に注ぐたまものを認め、識別し、一致のうちにまとめ上げるという、恵みと役割を授かっています。そしてそれを、地方教会での奉仕職の務めに共同責任を負う、司祭と助祭との秘跡的きずなのうちに行います。」

69 p.78

「司教の務めは、共同体の中で、共同体とともに、共同体のために奉仕することです。……司教は、とくに司牧訪問の際に、信者たちとともに過ごす時間もつのようにし、彼らの話に耳を傾け、自身の識別につなげることが大切です。」

70 p.79

「司教もまた、その奉仕職において同伴と支援を受けることを必要としています。……司教もまた誘惑にさらされ、ほかのすべての人と同じように助けを必要としている脆い兄弟であることを忘れず、信徒が司教に対し、過度な、また非現実的な期待を膨らませないよう助けることが大切です。司教を理想化する見方は、その繊細な職務の助けにはなりません。むしろ、真にシノドス流の教会となって神の民全員で宣教に参加することで、司教の務めは支えられるのです。」

71 p.79-80

司教とともに一司祭と助祭

(司祭)

「シノドス流の教会では、**司祭は人々に寄り添い、すべての人を受け入れて耳を傾け、シノドスの流儀に自らを開く、という姿勢で奉仕する**よう求められています。司祭は『自分たちの司教とともに……』一つの司祭団を構成しています。そしてさまざまなカリスマの識別と、地方教会に対する同伴と導きの任にある司教に、一致の奉仕にとくに留意しながら協力します。」

72 p.80

「司祭団の中においても、宣教につながる真のたまものの交換が行われるので。司祭もまた、とりわけ司祭職の初期段階や、弱って脆くなっている時期には、同伴を受け、支えられる必要があります。」

72 p.81

(助祭)

「キリストと教会の神秘に奉仕する助祭は、『祭司職のためではなく、役務のために』叙階されます。彼らは、愛の奉仕、みことばの告知、典礼において、その役務に従事します。……**こうした役目は、それぞれの地方教会の必要に応じて具体化されるべきです。**とくに、宣教するいくつしみ深いシノドス流の教会という展望で、すべての人に対し、もっとも貧しい人への関心を呼び起こし、存続させるためです。」

73 p.81

「助祭職は、今なお多くのキリスト者に認知されておらず、第二バチカン公会議によって、ラテン教会での固有の永続的地位として再興されたとはいえ、まだすべての地域で受け入れられてたわけではないです。……**地方教会に対し、より寛容に終身助祭を推進していくことを停滞させるべきではない**とする確たる証拠は、この教えをもってすでに示されています。」

73 p.81-82

シノドス流の教会における、叙階された奉仕者の協力関係

「シノドス総会の経験は、**司教、司祭、助祭が、職務遂行において共同責任を負っていること、その職務には神の民の他の成員との協力も求められている**ことを再認識する助けとなるはずです。任務と責任のより適切な配分によって、つまり**叙階による役務の固有のものと、他に委任できるものやそうすべきものと**をより大胆に**識別**することで、位階的職務それぞれが、靈的にいっそ健全に、司牧的にいっそダイナミックに、任務を遂行するのを後押しするでしょう。」

74 p.83

ともに宣教のために

「共同体と宣教の必要にこたえ、教会はその歴史の中で、叙階に基づく役務者とは別の、いくつかの奉仕職を生み出してきました。……その中でとくに重要なのは、制度化されている奉仕職です。……ラテン教会では、朗読奉仕者と祭壇奉仕者、カテキスタの奉仕職がそれに当たります。」

75 p.84

「こうした奉仕職のほかにも、儀式によらずに立てられても、しかるべき権威者からの委任をもって恒常に遂行される奉仕職もあります。……また恒常的ではない臨時の奉仕職もあります。聖体授与の臨時の奉仕者、司祭不在のときの主日の集会祭儀の司会者……などです。……地方の文脈での必要に基づき、こうした信徒による奉仕職を行使する機会を拡大して恒常的なものとする可能性について検討すべきです。最後に、さらなる条件や明確な承認を必要としない、自発的に行われる奉仕職が挙げられます。以上は皆、すべての信者が自身のたまものとカリスマを通して、種々のしかたで宣教に参加していることを示しています。」

76 p.85-86

「男女を問わず信徒に対して参画の機会を広げ、現代の司牧的要請にこたえる新たな奉仕や役務のかたちを探っていく必要があります。奉仕職は、協働の精神と、さまざまに担う共同責任の意識で務めるものです。とくにシノドスの歩みから、いくつかの具体的課題が見えてきました。

- a) 教会的識別の行程と意思決定プロセスの全段階（構想、検討、決定）に、信徒の身分の男女が、さらに幅広く参加すること。
- b) 教区や、教会の諸機関において、信徒の身分の男女が責任ある役職につく機会を増やすこと。
- c) 奉獻生活者の身分の男女の生き方とカリスマが幅広く認知され、力強い支援を得られるようにし、彼らを教会の責任ある立場に起用すること。
- d) 教会裁判所で、信徒の身分の男女有資格者が、裁判官を務める機会を増やすこと。
- e) 教会やその関連機関で雇用する職員の尊厳を真に認めること。および権利を守ること。

77 p.86-87

「シノドスの歩みを通じて、耳を傾けるということが、教会生活のすべての側面—諸秘跡、とくにゆるしの秘跡の授与、カテケージス、養成、司牧的な同伴ーにおいて、本質的な要素であることの認識が新たにされました。」

78 p.87